

会報

第19号(平成25年1月10日発行)

北海道高等学校世界史研究会

事務局 北海道札幌西高等学校

☎064-8624

札幌市中央区宮の森4条8丁目1番地

☎(011)611-4401/FAX(011)611-4403

高世研第44回大会に向けて

北海道高等学校世界史研究会
会長 橋本達也
(北海道室蘭東翔高等学校長)

新年、明けましておめでとうございます。

会員そして全道の各高校で世界史教育に携わっている先生方の益々のご活躍を祈念いたします。昨年8月3日、副学長である本田優子先生のご厚意により、札幌大学において「新学習指導要領に際し、国際理解を進めるための世界史教育」をテーマに第43回大会を開催しました。東京大学副学長及び東洋文化研究所教授である羽田正教授をお招きし、近著である『新しい世界史へー地球市民のための構想』を踏まえた講演をいただきました。その後、若手研究者2名と稚内高校の千田先生から『「新しい世界史へ」を読む』と題して、羽田先生が提起された世界史の新しい在り方について、それぞれの考えや疑問点が報告されました。実は、こうした合評会は大阪大学歴史教育研究会の特別例会としてすでに4月に実施されており、本研究会で、その続編が実施されたとも言えます。

羽田先生による「新しい世界史」の提起は、非常に大胆かつ斬新なものです。それは、著書の冒頭にある「これは世界史についての書物である。しかし、この本を読めば、世界史の概略が理解できるわけではない。この本はむしろ、これまで私たちが知っている世界史の常識を壊そうとしている。そして、新しい世界史を作り出すことを提案する。」という言葉からも端的に想像できると思います。

先生の目指す世界史は、主権国民国家を中核とするナショナルヒストリーの集積としての世界史ではなく、「世界市民のための『地球社会の世界史』」であり、そのための方法として、①世界の見取り図を描くこと②時系列史にこだわらないこと③横につなぐ歴史を意識することを提案します。我々にとっては、特に②は非常にラディカルであり、自分の信じてきた常識を揺すぶられるように感じるのではないのでしょうか。

先生自身も語られていましたが、「新しい世界史」は、目指す方向性の概略を示したものであり、具体的な世界史の記述はありません。そのため、「『地球市民という新たな帰属意識を与える』と言うが、帰属意識とは他の存在を前提とするものであり、国家を相対化しても地球市民という意識には繋がらないのではないか」という疑問も提起されました。すべてはこれから積み上げられていくのだと思います。

著書の中に、「いま私たちに必要なことは、イラクやアフガニスタン、パレスチナなどの問題を『彼らの』ではなく『自分たちの』問題として捉え、一緒になって解決に取り組もうとする姿勢である。そこに自と他の区別はあるはずだが、その上にさらに大きな『自分』を思い描くことが肝要なのである」という言葉があります。『世界史』と正面から向き合っている、世界史教師である我々にとって、この言葉が持つ意味と魅力は大きなものではないのでしょうか。

また、東北大学の小田中先生から「面白そうだから、突然ですが行っちゃいます」という連絡があり、お忍びで参加してくれました。お忍びらしいラフなスタイルがかえって目立ったところもありました(おっと失礼)が、大会に花を添えて下さり、嬉しい限りでした。

今年も8月に大会を実施します。特に、まだ参加経験のない先生方、是非とも様子を見てみて下さい。そして、今後ともコミュニケーションを取り合って、「『世界史』の授業を通してできること・目指すべきこと。」を互いに探っていきましょう！お待ちしております！

第43回研究大会記録

「新学習指導要領実施に際し、

国際理解を進めるための世界史教育」

日	時	平成24年8月3日(金)
会	場	札幌大学 6103号教室
講	演	羽田 正 氏(東京大学東洋文化研究所教授)
報	告	後藤 敦史 氏(日本学術振興会特別研究員PD)
		中村 武司 氏(弘前大学人文学部講師)
		千田 周二 氏(北海道稚内高等学校教諭)
司	会	吉嶺 茂樹 氏(北海道有朋高等学校教諭)
記	録	横山 茂 氏(北海道札幌啓成高等学校教諭)

講 演

『新しい世界史へ』

東京大学東洋文化研究所教授

羽田 正 氏

司会：吉嶺(有朋高校教諭)

一本講演の企画に至った経緯の説明―

『詳説世界史B』を編集した副教材『世界史A読本』を使用して古代・中世史の内容で「世界史A」を指導していた愛知県の進学校が県教委から厳しい指導を受け、夏期休業中に相当時間数の補習を義務づけられた事件の報道を知った。この事件で問われるべきは、世界史Aで補習を受けて近現代史を学んだ生徒がいる一方で、補習を受けることもなく、古代・中世史のみを世界史Aで学んだ生徒との教育格差が現場で生じているという事実である。世界史教育の危機に直面している今、世界史で何を教えるべきか、また教員が持つべき世界史のイメージについて考えさせられた。今回、西洋史学会での

研究発表を機に、「新しい世界史」運動を進めている羽田氏の講演を企画するに至ったことを講演に先立ち報告したい。

―羽田氏の講演内容の要旨―

今回の愛知県での報道には驚いている。現代世界の成り立ちを知ることが世界史を学ぶ目的と考える。もともと、近現代史を中心に教えるべき科目である世界史Aで教員が古代・中世史から教えたいという心情も理解できないわけではない。自分も大学入学当初は古代史に関心があり、ローマ帝国の歴史などを学びたいと思っていた。古い時代に関心を持つこと自体は結構であるが、問題はいかにその時代を教えるかということにある。この度上梓した『新しい世界史へ』(岩波新書)の書名の「へ」に注目していただきたい。この書物のねらいは、新しい世界史の内容を述べるのではなく、新しい世界史「へ」向かうべき必要性を運動として述べることにある。

この書物の副題に含まれる「地球市民」とは、現在地球上に存在している政治・経済・環境問題等様々な諸問題への対処を迫られているこの地球上に存在しているすべての市民を意味す

る。環境問題ひとつ取り上げても一国では解決不可能な問題であることがわかる。経済もグローバルな営みであり、一国のみで成り立つものではない。したがって、これらの諸問題は地球全体で取り組まなければ解決不可能であるにもかかわらず、わたしたちは自らが地球市民であるという自覚に乏しいのではないか。その理由は自国と諸外国という物の見方、日本人であれば、日本人と外国人を区別するという意識、自と他を区別する意識である。こうした見方における世界史は、現代世界の成り立ちを国民国家の歴史の集合体として捉える見方を越えられない。しかし、今後必要になるのは国民国家の上位概念としての「地球市民」である。ところが現行の世界史Bの教科書を見ると、古代・中世において文化圏別に個々に独自の文明を発達させた世界の諸地域が近代において西洋諸国によって一体化され、これに合衆国が加わり、欧米諸国中心の世界史記述になる。しかし、地域世界はそれぞれ個別の完結した歴史を有しているのにその一部分の歴史についてのみ記述され、教えられているということに注意しなければならない。国民国家の歴史が通用するのは、日本やドイツが国民国家のアイデンティティを追求した19世紀後半ぐらいのものであろう。国民国家・主権国家中心の歴史観を越えた上位概念である地球上に住む人々の歴史を考えることが必要ではないか。

私が提唱する地球市民の世界史は、三つの見方、三つの方法から成る。まず、見方のひとつとして、「中心はいらない」と言いたい。ウォーラーズテインのシステム論は、経済を重要なファクターとして捉えた、資本主義世界の形成という観点から見た西欧中心史観である。前近代における宗教が重要な役割を果たした時代に関して経済を重視した史観は不的確である。歴史を捉えるためにはいろいろな観点があってもよいのではないか。西欧中心史観において日本

のようなアジアの歴史はその中に入れてもらえないのに、このような史観がアジアに押しつけられるのはおかしい。また、ある地域に相関して見られる歴史的現象を発見することも、どこかに中心を求める史観においては不可能になる。それぞれの歴史的地域の個性や独自性を研究することは、結局はそれを西欧の歴史との比較において捉える見方に帰着する。それよりはむしろ各地域世界の共通点や類似点を探究することが地球市民の世界史には相応しい。こうした歴史の見方が従来とは異なる新たな歴史解釈を可能にするのではないだろうか。

地球市民の世界史の方法として、ある時期の世界全体の見取り図を描くことが必要である。例えば、ローマ帝国の歴史について言えば、従来はローマ帝国の盛衰史を時系列的に記述してきたが、これからは紀元前後の世界全体の見取り図を作成し、その中で経済はどのように動いていたのか、各地域世界の関連性や相関性はどうかであるかについて考察してみることが必要である。このようにして作成した歴史の見取り図をわたしたちが生きる現代世界と比較してみること、そこから何がわかるのかということを探ることを試みたい。従来の世界史Aの教科書では、紀元前後の世界が以後においてどのように変化していくのか、ということが記述されていた。しかし、私はこのような時系列的变化を追求する必要はなく、紀元前後の世界と現代世界の比較ができれば十分であると思う。それぞれの人が思い描く現代世界を2千年前の過去と比較してみるのである。そのようにして現代世界に存在するものが2千年前にはどうであったのか、比較してみることによって過去の特異性が理解できるであろう。これが2点目の「時系列にこだわらない」ということの意味である。そうすることによって、時系列の呪縛から逃れることができるだろう。例えば、イスラーム世界が過去に成立し、それが現代までどのように

変遷し、存続してきたのか、という過去（イスラーム世界）への呪縛から解放されることが重要なのである。さらに言えば、ヨーロッパ世界が過去に成立し、それがそのまま今日まで存続してきたという見方にこだわる必要がどこにあるのであろうか。時系列にこだわらないことによって、過去が現代と直接に対話することが可能となるのである。そしてヨコに世界をつなげてみることによって、国民国家への呪縛から解放されうる。諸地域をヨコにひとつにつなげてみることによって、世界がひとつであるというイメージを得ることができる。

このようにして、過去における世界の見取り図を何枚か描いてみてはどうか。そもそも歴史という学問は出来事の因果関係を知ること面白さがあるという批判がある。その批判にも一理あるが、過去と現代との比較からも歴史の面白さを知ることができるのではないか。まだこうした試みは実現しておらず、実践へと向かうべき運動として提唱してみたいのである。国民国家中心の歴史の枠組みが成立して百年経つが、その間に世界は大きく変貌したにもかかわらず、この枠組みのままでよいのであろうか。現代が変化することによって過去を見る眼も変わるのである。だとすればわたしたちが過去において重要とみなす事柄も変化して当然であろう。同じ方法で研究してもうまくいくはずがない。専門分野を決めて従来の枠組みのままで研究するのではなく、歴史の枠組み自体を見直し、再考することが必要である。そうした志を有する研究者と共同研究を行っている現状であるが、残念ながらまだ研究成果としての歴史叙述を発表するには至っていない。高校教員からは従来の世界史教科書に取って代わる代案を出すべきだと厳しく要求されるが、そう簡単にできるものではない。申し訳なく思うが、まずは世界史教科書に対する見方を変えてみることから始めてみてはどうだろうか。

私はイスラーム世界、イランの歴史を研究対象にしていた。世界史教科書には随分とイスラーム世界という用語が登場するが、キリスト教という用語はわずかしか出てこない。なぜ世界史教科書でイスラーム教は重視され、キリスト教は軽視されているのか。それはキリスト教の世俗化が進んだ19世紀の歴史研究者がキリスト教に捕らわれた歴史の見方は中世的で遅れた史観であると評価したからである。イスラーム教という用語が頻出するようになった理由は、1970年代以降に活躍するイスラーム研究者たちが西洋中心史観に対抗し、かつ現代世界が直面する諸問題を理解するために不可欠な歴史概念としてイスラーム教の重要性をしきりに主張したからである。私はイスラーム世界に関してすべてを語る必要はないと思うし、キリスト教に関しては、それが現代世界に対して持つ影響力の大きさを考えれば、もっと取り上げられてもよい歴史概念ではないかと思う。しかし、現状がそうならないのは、歴史教育の枠組みによるバイアス、特に文科省が発行している学習指導要領に記載されている指導上の留意点や取り扱い方の指示によるものであろう。しかし、私は世界史の枠組み自体のドラスティックな変更が必要であると思う。

「ユーラシアの近代と新しい世界史」の取り組みは学術振興会の科学研究費の助成を受けて2009年から始めた共同研究を始点とする。私は2005年に『イスラーム世界の創造』を出版したが、この書物の意図は、イスラーム世界という歴史概念がある時期に意図的に作られた歴史概念であるということを示すことにあった。この概念が現在の諸問題を解体する機能を有する以上、一旦この歴史概念を解体し、相対化する必要があるのではないかと主張したのである。このようなことを考える契機となった出来事は2001年に発生した9・11（世界同時多発テロ）である。この事件以後イスラーム世界に

対するパッシングが急激に強まったのは、そもそもイスラーム世界という概念で一括りにして扱う見方に因るものではないか。イスラーム世界に暮らす人々と話しをしてみても、わたしたちと考え方や生き方がさほど異なるようには感じられず、むしろ共通点や類似点が多かったと思う。中国人と話しをしても同じことを感じた。なぜ日本と中国、イスラームとヨーロッパというように区別する必要があるのだろうか。地域ごとにバラバラに学ぶ世界史はまずいのではないか。これが発想の根源である。アジアとヨーロッパ、東と西とに分けて相互の交流や影響を考える世界史はもう古いと強く思うようになった。むしろユーラシア大陸全体としての歴史をどう捉えるかということが重要である。アフリカとアメリカの歴史については後から考えればよい。まずは18～19世紀のユーラシア史をテーマにして研究してみたい。そして、人、モノ、情報の動きについて調べ、全体としてどのように総合すればよいかについて考察する。5年間の研究期間があたえられているが、1冊の研究書の発表で済むものではなく、様々な見方による多数の研究成果を発表するものであろう。とりあえず現段階ではひとつの見取り図を完成させることはできたのではないかと思う。

研究組織に関しては、総合責任者は私が担当し、17名の研究分担者の他に、連携研究者、研究協力者がいて、研究に対する助言をもらったりしている。研究者間のヨコの連携をつくることを目的に研究集会を何度も積み重ねた。海外研究はもちろんのこと、外国人研究者を交えた国際研究集会も開催した。2、3年目には新しい世界史について若手研究者からいろいろなアイデアを出してもらった。2年目には奴隷、海賊、女性、商館等のテーマで研究発表を行ったが、マイノリティー志向の研究内容であった。これでは通説に対する意義申し立てに終わり、従来の研究内容に対して付随的な意義をもつに

すぎない。1年目は問題提起、2年目は第1回目の研究成果の発表、3年目は2回目の研究成果の発表を行い、4年目の本年はマニフェスト本として『新しい世界史へ』を発表することができた。私は、自分が所長を務める東京大学東洋文化研究所、復旦大学（中国）、プリンストン大学（合衆国）と研究に際しての協力関係を結び、世界史をテーマに研究協議を行う機会を作った。今年『新しい世界史へ』の合評会を数回行い、提携している大阪大学とも新しい世界史に関するシンポジウムを開催することができた。復旦、プリンストンの外国人研究者との対話を通して世界史理解の重要性を認識することができた。このようにして地球市民という歴史の見方を共有して個別に歴史を見ていくことができよう。研究会の方針は、世界史における共通テーマを設定すること、個別テーマは世界史的意義を有するものであること、若手研究者に刺激と意欲を喚起する内容であること、研究会の主旨を理解し、HPから参加申し込みをした人に対しては参加をオープンにすること等である。研究集会を開催した場合には必ず日本語と英語で研究報告を掲載している。札幌でも研究集会を開催したことがあるが、東京大学での開催をメインにしている。私はすべてに参加することにしているのも、スケジュールは余裕のないものになる。今後は期限となる次年度中に研究成果を東京大学出版会から出版する予定である。これは共同研究に参加した12名の研究者による新しい世界史の立場を踏まえた個別研究論文となるであろう。出版事情が厳しい昨今、オンラインで研究論文を公開することも視野に入れている。国際研究集会はモンテリオールやナポリ等で開催される予定である。今回の共同研究終了後も新しい世界史を運動として継続することが大切である。大阪大学との連携、次世代研究者による新たな共同研究の開始が望まれる。大事なことは新しい世界史に関する個別論

文を続々と発表することである。そして講演の機会を通じて様々な人々に自分の見解を伝え、理解してもらうことである。世界史に対する従来の見方は学界でも容易に変わるものではない。今後における世界の容姿により、私の新しい世界史の見方自体が古くなり、変更を迫られることも起こり得るだろう。

私がフランスに留学して博士論文を書いた1980年代初頭にはFAXもコンピュータも利用されておらず、電話料金もすこぶる高く、日本の家族との連絡はほとんどが手紙であった。手紙のやり取りには約2週間要した。現在は航空機もアンカレッジを経由せずに直行でき、国際会議も比較的簡単に開催でき、連絡もメール等を利用すれば、瞬時に行うことが可能である。これほど高速化し、利便性を高めた現代における世界認識ならびに世界史認識が30年前と同じであるはずがない。それは変化して当然である。個人的体験だけから考えても、今後30年後における世界が現在と比べて相当に変化しているであろうことが予想される。それに伴って世界史の見方が変わっていくのも当然である。最後に、これまでの世界史教育が大きな成果をあげてきたことを認めるのはもちろんであるが、今後は一般常識的な従来の世界史の枠組みを変えることが必要であると述べ、今回の講演の結びとしたい。



【質疑応答】

質問1 刺激的な内容に感謝したい。『新しい世界史へ』、『イスラーム世界の創造』を読み、中央アジア史を専攻する自分にとっては身に詰まされる思いをし、今後専門的研究者はどうすればよいかと考えさせられた。まずはマクロな視点をもつことでよいのか、授業者としては世界史の知識が教科書の記述に帰着するものであり、だとすれば国民国家の呪縛から逃れられないのではないか。（北嶺中・高等学校 長峰）

回答1 専門的研究者の視点と教育者としての視点は異なるのが当然である。ある地域に関して関心をもつ場合、どのような世界史の枠組みで見るとのかということが肝心である。その場合に地球市民の世界史を考えることは不可欠である。国民国家のアイデンティティは重層的なもの（例.札幌市民+北海道民+日本国民）であって、それより上位の世界史概念を視野に入れないので国民国家史観でしか世界史を見ないのである。

高等学校世界史教科書の影響力が強いので世界史の見方を変えることは難しいのではないかとこの疑問が生じるのは自然である。わたしたちにできることは限られているが、戦略的には「学習指導要領」の変更を迫り、新しい世界史の概念を検討してもらう機会を要求することである。売れない教科書が廃刊になるように、現場に受け入れられなければだめであろう。だからといって、新しい世界史への取り組みを断念する訳にはいかない。

質問2 『新しい世界史へ』を読んで衝撃を受けたことは、時系列をはずして世界史を見ることであった。明治以降の歴史教育で時系列をはずした世界史が教えられたことはなく、「学習指導要領」でも現代世界の成り立ちを知り、現代に生きる日本人としての自覚を養うというこ

とが世界史教育の目標として掲げられている。時系列をはずした世界史で何を学ぶのかと質問したい。(札幌啓成高校 横山)

回答2 ひとつは現代世界を知ること。過去の世界の見取り図と現代世界の見取り図の相違点や共通点、両者の特色を考察すること、過去のある時点と現代との比較的考察を行うこと、換言すれば、過去を、現代を理解するために利用するのである。

質問3 現代世界に対する理解が新しい世界史の出発点であるが、複雑で難しい現代世界をどのようにして知ればよいのか、質問したい。(札幌啓成高校 横山)

回答3 大学で学ぶすべての学問は現代世界を知るための学問であるが、そのすべてをわたしたちは学ぶ余裕はない。現代世界において重要と思われるいくつかの共通の価値を選択し、例えば現代イスラーム世界における宗教の社会的役割という視点を通して過去のそれと比較し、両者の特徴や共通点・相違点を学ぶことによって現代世界に対する理解を得ることができる。このような現代と過去の比較を行う。本日の発表はあくまでも新しい世界史へのマニフェストとして理解してほしい。現在はまだ結果を評価する段階ではないので、研究を進めさせていただきたいと思う。



報告・研究討議

『新しい世界史へ』を読む

【報告 I】

一「新しい世界史」と日本史学・日本史教育—

日本学術振興会特別研究員 P D
後 藤 敦 史 氏

幕末の徳川幕府の政治・外交が私の狭い意味での研究領域である。今回は「新しい世界史へ」の運動と日本史学との関係について考察したいと思う。

まず、「新しい世界史へ」にどう向き合うかという点に関して述べたい。最近における世界史に対する危機意識は、南塚信吾氏や桃木至朗氏の著書から伺うことができる。また、長野県の高校教員小川幸司氏の論文「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」では、世界史教育への危機感が表明されており、現在の世界史教育のあり方が現代世界からの要請に応えられていないことが共通認識になっていると言えよう。特に環境問題等の地球規模への拡大に伴い、地球市民という帰属意識の必要性が高まっているなかで、日本を含む世界を見渡した世界史叙述に対する危機意識から世界史叙述のあり方そのものの改革を主張しているのが羽田氏の『新しい世界史へ』の斬新さではないかと思われる。ここからどのようにして新しい世界史をつくるのかという議論が重要になる。

日本史と世界史の関係については、①日本人のための日本史。②日本人のための世界史。③国を超えた数カ国の人々のための広域の地域史、が考えられる。②については私が昨年まで所属していた大阪大学歴史教育研究会が改善・刷新の試みを発表してきた。③については日・中・韓やEU内の共同教科書の試み等が出されている。羽田氏の試みは④地球市民のための世

界史として、上記①～③とは別個に位置づけられる点にその斬新さが認められよう。

日本史のあり方について言えば、現行の日本史教育が日本への帰属意識を高める役割を果たすべきものとして認められてしかるべきである。しかし、それが一国内のナショナリズムを強める結果をもたらすことは避けなければならない。特に日本と世界を截然と区分するということは桃木氏が指摘するように、世界は日本とそれ以外の国々から構成されるという認識を生み、南塚氏はそれが「鎖国」的な歴史認識へつながりやすいという危惧の念を表明している。ここから私は、日本史も取り込んだ世界史の必要性を指摘したいのである。

次に、羽田氏が提唱する「新しい世界史」に対して日本史学がどう対応したらよいかということについて考察したい。羽田氏が「新しい世界史」が特に日本史は必ずしも必要としないと述べていることに言及する必要がある。これは日本史学が「新しい世界史」と無関係であるということを中心主張しているのではなく、世界の見取り図を描く作業において、日本列島に暮らす人間集団を、例えば朝鮮半島や中央ユーラシアに住む人間集団と同列に扱うということであり、要するに「新しい世界史」は研究者全員が参入可能な構想となっているのである。したがって、日本史、東洋史、西洋史という枠組みを取り払い、あらゆる分野の歴史研究者が参加すればよいと思われる。

次に、羽田氏の「新しい世界史へ」に対する私の批判的コメントを述べたい。まず、「地球市民」というアイデンティティ（帰属意識）をどのようにして形成していくのかという問題がある。これに対してはもっと議論が必要であろう。特に、羽田氏が主張する国家を相対化する視点をもつということと、地球市民への帰属意識をもつということは別次元の問題ではないかと言いたい。どこかの県民意識や、市民意識、

地域意識をもつことと比べて、「地球市民」への帰属意識をもつことには相当困難な課題が待ち受けているのではないかと予想される。そもそも帰属意識というものは、他者と自己の区別の自覚から生まれるものであり、三谷氏が指摘したように、幕末期日本人の場合、「忘れ得ぬ他者」としての中華・西洋諸国という意識を前提にしてはじめて日本人の国家意識を形成することができたという。これは近代主権国家体制に日本が巻き込まれることによって、他者と自己との区別において日本人が国民国家としての国民意識を形成したということの意味する。だとすれば、「他者」のない「地球市民」への帰属意識はどのように形成されるのであろうか。しかし、この課題は困難だからという理由であきらめてはならないものである。

最後に、「時系列」をどの時点で取り入れればよいかという点について私見を述べたい。羽田氏は「「世界」という時空間の通史の叙述には当面慎重でありたい」と述べ、その一方で、「時系列」に沿った説明が必要であることにも触れている。羽田氏の著作『新しい世界史へ』106頁の記述からは、概念としての「ヨーロッパ」が生みだされ、それが世界に影響を与える「過程」、すなわち時系列的説明が必要であると読み取ることができるからである。

「新しい世界史」は、無理だとあきらめてはいけない。「地球市民」として環境問題に対処する必要に迫られている現在、国家間の利害対立を述べるだけの歴史記述ではもはや通用しない。羽田氏が述べているように「新しい歴史」を断念することは歴史学という学問の死を意味することであり、さらに言えば、人類の死を意味することでもある。今回の羽田氏の「新しい世界史」をひとつの「たたき台」として、歴史学や歴史教育に携わる人々による活発な議論が重要であることを述べて私の発表の結びとしたい。



【報告Ⅱ】 —新しい世界史と時系列の問題— 弘前大学人文学部講師 中村 武 司 氏

私は西洋史を専攻する歴史研究者であるが、専門の立場にこだわらないで話を進めていきたい。羽田氏の著作『新しい世界史へ』は、19世紀に形成された国民国家の歴史観に挑む大変ボレミカル（論争的）な内容の書物である。今回の私の報告はこの書物に対して時系列の問題からコメントするものであるが、それにとどまらず、時系列という問題をどのように考えればよいかといういくつかの視点を提示したいと思う。

羽田氏は世界の現状を追認するだけの現在の世界史と歴史学は、政治的・社会的・文化的力を失っていると指摘する。羽田氏が提唱する「新しい世界史」とは、「地球社会の世界史」を意味するものであり、現在広まっているグローバルな帰属意識のための世界史＝グローバル・ヒストリーの間では追認されているものと言えよう。歴史家ジョン・リチャード氏によれば「グローバル・アイデンティティ」の共有という事態を指す。また、オブライエン氏も「グローバル・シチズンシップ」（グローバルな市民意識）を支えるためのグローバル・ヒストリーの必要性を指摘している。

英語圏では世界史に関して4つの表現がある。①ワールド・ヒストリー（world history）—世界史②グローバル・ヒストリー（global history）—地球規模の歴史③ユニヴァーサル・ヒストリー（universal history）—全人類の歴史④エキュメニカル・ヒストリー（ecumenical history）—全世界の歴史、である。

次に、なぜ新しい世界史が必要なのかという点について考えると、三点理由があげられると思う。①日本人の世界史②自他を峻別する二項対立的な歴史③ヨーロッパ中心史観（ユーロセントリズム）。これは日本人のような非ヨーロッパ人がこの史観を受け入れて世界史を再生産していること自体に大きな問題があると言えよう。最近読んだ中国でのグローバル・ヒストリー研究においても、ヨーロッパ中心史観の強化が問題視されていた。ヨーロッパ中心史観のいちばんの問題点は、地理的・空間的概念としてのヨーロッパと概念・中心的理念としてのヨーロッパが混同されて使用されていることである。こうした実態を踏まえ新しい世界史を提唱する羽田氏は、戦略的にヨーロッパ中心史観の排除を意図し、中心性の排除と関係性・共通性の発見の重視を主張している。そして、新しい世界史を構想するために、①世界史の見取り図を描くこと②時系列史にこだわらないこと③ヨコにつなぐ歴史を重視するという三点を提案している。ここから空間と空間の間とその相関性が考察される。さらに西洋史の視点から興味深いのは、羽田氏がヨーロッパ概念の形成過程究明の必要性を指摘していることである。

読者の意見が分かれるのは、羽田氏が中心性の排除を指摘していること、どのようにして地球市民のアイデンティティを育成するかということであろう。そして時系列にこだわらないという方法は研究者にとっては衝撃的である。そもそも歴史学は時系列の変化や因果関係を考察する学問である。羽田氏によれば時系列史とは、

過去から未来へと不可逆的に一直線に流れる時間概念を用いる独特な歴史観であり、また歴史学や人類学の知見によれば、時間の捉え方や時間概念は複数あって当然なので、時系列史を無批判的に受け入れることに対しては慎重であるべきである。

以上の考察から私は時系列史を見直すために二つの論点を指摘したいと思う。一つは世界史における時代区分というものをごどのように考えるかということである。二つ目は時系列をはずした歴史学に注目して見ることであり、「記憶の場」に関するものである。

まず、世界史における時代区分という問題であるが、ナショナル・ヒストリーやグローバル・ヒストリーも含めた、従来の世界史の見直しを迫る目的論的な世界史では、地理的空間や範囲というものをどのように考えるかという問題が生じる。しかも歴史学は過去を問う学問なので、空間のみならず時間も考察の対象に含まれる。グローバル・ヒストリーにおいては空間の捉え方や地域間の相関性・共通性に関する考察は優れているが、ともすれば時間認識が軽視される傾向があり、古代・中世・近世・近代といった従来の時代区分が追認され、むしろ時代区分の問題が無視されている。わたしは時代区分の問題は無視されるべきではないと考えており、その点において時系列をはずすという羽田氏の主張に対しては批判的にならざるを得ない。むしろ時系列史を問題発見的な意図の下に見直してみたいと思う。例えばグローバル・ヒストリー等が研究の対象にしている「環境史」は、数千年単位を時代区分の単位として考察しており、このような時代区分の捉え方は従来のそれを相対化する意義がある。もちろん近年の世界史研究が時代区分の問題を無視してきたのではない。例えば、モンゴル史の杉山正明氏は二つの時代区分を提唱している。これによると、ユーラシア世界史の時代とヨーロッパの進出以

後における地球世界史の時代という二つの時代区分が可能であるという。さらに森安氏は、軍事力や経済力、情報収集能力を基準に時代区分を設定する方法を主張している。そこでは八つの時代区分が提唱されている。以上は東洋史研究者が提唱する時代区分である。一方英語圏はどうかといえば、イギリスのグローバル・ヒストリー研究に関しては、イギリス帝国史研究のホプキンスとベイリーが、グローバリゼーションの4つの歴史的局面を提起している。それによると時代区分は①古典的グローバリゼーション②プロト・グローバリゼーション③近代グローバリゼーション④ポストコロニアル・グローバリゼーションとなり、①・②は前近代的な内容を有し、③・④は近代的・工業化的な内容を含む。この時代区分はグローバル・ヒストリーを前提にした問題発見的な時代区分であると共に、それぞれの時代区分が明確に区別されていないという点において発展段階的な時代区分とも異なる。①から②への以降の間には約200年間の重なる時期が含まれていることから見ても、あるひとつの要素だけを基準に時代区分を構想しているのではないことがわかる。①はウォーラステインのシステム論における世界帝国に相当し、ユーラシアを統合する世界帝国を築いたモンゴル帝国を想定したものであり、森安氏はこれをさらに8段階のサブ・システムに時代区分しているが、これは世界規模における人・モノ・金の動きとその開花を可能にしたひとつの世界帝国を想定しているからである。世界規模の人・モノ・金の動きを可能にしたのは資本主義的な考え方やイデオロギーではなく、世界帝国や世界宗教の存在であることに留意すべきである。②は世界経済に相当するものである。羽田氏が主張する中心の排除に関してはヨーロッパ／非ヨーロッパ、中核／周縁といった二項対立的な歴史観を克服することを意図したものである。空間を重視するあまり時間や時代

区分を軽視してきたグローバル・ヒストリーに対し、時代区分はどうあるべきかに関しては踏み込んだ議論や対話が必要であると思われる。

最後に時系列をはずした世界史に関して私見を述べたい。すぐに想起されるのは、ピエール・ノラを中心とした「記憶の場」プロジェクトである。これはパリ、エッフェル塔といった空間のみならず、フランク人やガリア人、三色旗、ジャンヌ・ダルクといった様々なテーマがフランスの集合的記憶を表象する場として考察され、史学史的アプローチが採られている。しかし、この研究は時系列的で目的論的な歴史叙述を解体するというねらいの下に構想されたにもかかわらず、結果的にはナショナル・ヒストリーを再構築してしまうという限界を露呈した。その例証として、1931年に開催された国際植民地博覧会の記述は省かれているが、これはフランスというナショナルな歴史事象のみを意図的に取り上げていることから理解できる。つまり、フランスというナショナルな事象を越えた問題は排除されたのである。結果的にこのプロジェクトはフランス的なもの、ナショナル・ヒストリーを再構築することになったのである。こうした理論的限界を克服する試みとして、『東アジアの記憶の場』をあげておきたい。この著作では日本・韓国・台湾に共通するテーマが考察されており、「東アジア」は所与の地理的空間とは見なされていないことが注目される。「東アジア」は、ナショナルな記憶や枠組みや記憶の共有モデルを解体・脱構築するための方法的概念として提唱されているのみならず、新しい世界史やグローバル・ヒストリーが取り上げているような関係性や共通性が重視されており、従来の時系列的・目的論的な歴史叙述は為されていない。このような研究を踏まえて見た場合、地域を越えたグローバルな「記憶の場」が構想可能かどうか問いかけてもよいのではないかと。もしそれが可能だとすれば、「記憶の場」はメ

タ・ヒストリーとしての性格をもちうるのであって、だとすれば時系列をはずした新しい世界史を構想するために、地球市民のための「記憶の場」を追求し、歴史的記憶の共有を試みることは、地球市民のアイデンティティ（帰属意識）の形成に寄与できるのではなかろうか。



【報告Ⅲ】

—「もしも北の果ての高校教師が羽田正の『新しい世界史へ』を読んだら」—

北海道稚内高等学校教諭

千 田 周 二 氏

羽田氏の著作『新しい世界史へ』を読んだ率直な私自身の感想としては、第3章までは素直に腑に落ちるものであったが、第4章以降の箇所では羽田氏独自の構想が述べられた部分は具体的な何かとして提示されているわけでは必ずしもないので少々見えにくさを感じた次第である。レジュメの表面はこの著作の要点をまとめたもので、大方の賛同を得られる内容ではないかと思うので、裏面の私見について述べたい。

まず、羽田氏の「新しい世界史」が高校世界史を変える可能性については、近代教育が国民育成のための教育であると定義づけたとしたなら、それから完全に脱却できるかといえば、かなり難しいのではないかと考える。しかし、現

行の世界史の枠組みにおいて、世界史の見取り図を取り入れるとか、ヨコに世界史を見るとかという構想は、図説などにすでに取り入れられているのではないか。何世紀の世界とか、モノの流れとか、世界史Aで採用されているネットワーク論等が世界史に差し込まれている。これらのものが生徒にとって地球市民の概念の涵養に結びつくとは必ずしも思えないが、何らかの形で地球市民意識の萌芽をもたらすのではないかと期待できる。またそのことによって、例えば「ヨーロッパ中心史観」をはじめとする中心史観を解体することはできるのではないか。よく中国史では、雲南、日本、ベトナム、朝鮮といった地域が必ず中国の下にぶら下がる。例えば、明代モンゴルという表現が使われることがあるが、これは現行の世界史教科書が中華史観、中国中心史観に染まっている証拠であろう。こうした見方にくい込まなければ改善は不可能である。したがって、現在やらねばならないことは、現行の世界史教科書に「新しい世界史」の内容を少しずつ挟み込んでいくことである。そのためにも挟み込めるような具体的な研究成果を出してもらいたい。たとえ教科書では無理でも、検定のない資料集や図説なら大いに可能であろう。ここから現行世界史の枠組みの解体が始まるのではないかと思う。

次に、私が疑問に思う表現として、羽田氏の「地球市民」がある。なぜ「市民」という言葉が用いられているのか、この言葉にどういう意味が込められているのか、私にはわかりにくい。であるなら、「地球人」ではダメなのかとか、なぜ「地球人」ではなく、地球「市民」という表現を用いたのか、羽田氏の意図を聞いてみたい。「市民」という言葉にはイデオロギー的含みもあるように感じられる。さらに言えば、地球市民としての帰属意識をもたせることは可能なのか、かなり困難ではないか、だからこそチャレンジする意義もあると思うけれども。地球

はひとつ、人類はつながっているとよく言うが、国家のエゴや市民のエゴというものもあるのではないか。環境問題への対策として温暖化防止が必要であるが、私が住んでいる稚内では平均気温が低く、むしろ夏の1、2℃平均気温が上昇した方が望ましいくらいであるが、こうした寒冷地に住む人々にとっては温暖化防止が必要であると言われてもその必要性は実感されにくいであろう。温暖化防止ひとつ取り上げてみても、地球市民としての帰属意識をすべての市民が共有するのはなかなか難しいのではなかろうか。

近現代史を「新しい世界史」でどのように取り上げるかという問題についてであるが、羽田氏が19世紀以降の世界史解釈についてはまだ十分に論じることができていないので、別の機会にあらためて深く掘り下げてみたいと述べていた。しかし、私としては19世紀後半から現代にかけての歴史を「新しい世界史」でどう記述するのかということに大変興味があるので、ぜひこの点を見通した「新しい世界史」に取り組んでほしいところである。世界史担当教員にとって近現代史の授業は、国民国家単位で進めなければならぬので、大変やりにくく授業がつまらなくなるので嫌われやすいと思う。特に、国別に細かく政治史を取り上げ、首相が誰に交替してどういう政策が採られたなどということの説明しても面白くない。この時代こそ、「新しい世界史」が新しい見取り図を提示し、従来の国民国家史の枠組みを解体するような統一的な見方を示すことができれば、我々教員にとっては目からウロコである。ぜひ今後に期待したい。

もうひとつ私が疑問に思う点は、「新しい世界史」の構想で示された5つの価値である。それは、①法の支配②人間の尊厳③民主主義の諸制度④国家間暴力の否定⑤勤労と自由市場であるが、これらの価値に合わないものは省かれて

しまう。だとすればこのような視点は、「現代価値中心史観」になってしまうのではないか。これらの視点は法学や政治学にとっては有効であろうが、歴史学は過去を見ることによって、我々が当たり前だと考えているものを突き崩してしまう力をもつ。一例をあげると、民主主義というのは果たして普遍的価値をもちうるのか、むしろもっと歴史的なものではないのか、また誰にとっても普遍的価値をもつと思われている人権を突き崩してみることが歴史学だからこそ可能ではないか。現代における民主主義のようなものを過去にも見つけることが歴史を学ぶことだとみなすことに対して私は違和感をもたざるを得ない。

それでは、「新しい世界史」を高校教育にどのように取り入れていけばよいのかということについて述べたい。中学歴史では世界史の学習量は大変少ない。そういう生徒が「新しい世界史」の見取り図を提示されても理解できるのだろうか。一度世界史を学習した者なら「新しい世界史」の見方の斬新さが理解できるのではないか。つまり「新しい世界史」とはある程度の基礎知識を必要とする世界史なのである。ここから考えると、高校1年で従来の世界史を学習した生徒が3年で「新しい世界史」を学ぶなら理解できるであろう。しかし、現行の教育課程から判断すれば、残念ながらこうした世界史学習を可能にするような単位数を充当できるだけの時間的余裕はないであろう。

「世界史A」について私は一度世界史を学習した者にとって興味深い科目ではないかと思う。そもそも知識のない生徒に「世界史A」を教えることこそ困難なことではないかと思う。「新しい世界史」を学ぶこともこれと同じことではないか。中学校で世界史を学び、高校で「新しい世界史」を学ぶことは現状では無理だと判断すれば、「新しい世界史」を大学1年で学部を問わず「世界市民育成のため」として教えるのがよ

り現実的ではなかろうか。こうなると高校では「新しい世界史」を読み解くのに必要な基礎知識なり歴史の見方を教える科目として世界史を考えるなら、その延長上に次回の学習指導要領改訂のために議論されている「歴史基礎」的な科目のあるべき姿が見えてくるのではなかろうか。また、知識や経験を豊かに持つ社会人のための「大人の世界史」として「新しい世界史」を構想してみることも教養ある社会人の学び直しとして大変有効ではないか。最後に、「新しい世界史」における国民国家の枠組みを解体する試みを従来の国民国家を対象に分析する他の学問分野に対して提示し、研究を学際的なものにしていくことも有意義なことではないかと述べて結びとしたい。



【研究討議】

◇ 質問に対する羽田正氏の応答

(1) 地球市民の考え方について

どうして「地球人」ではダメで、「地球市民」でなければならないのかという質問に対しては、当初は「地球人」という表現は思いつかなかったということである。私が用いる「地球市民」は地球に住む人々という意味で用いているので、「地球人」であってもまったく問題ない。「世界市民」という表現は、カントやヘーゲルを想起させ、近代的意味における概念とも受け取られかねないので、この表現は避けることにした。

地球に住むすべての人々が同じひとつの「地球市民」としてのアイデンティティを共有すべきであると考え、どのような社会組織において実現されるのかということに関しては何ら具体的な提案はしていない。王国、共和国、連邦等いろいろ考えられるであろうし、どの組織がいちばん適しているかについては簡単に述べられるものではないと思う。そうした議論を積み重ねることにおいて、現段階では仮称である「地球市民」という概念もより練り上げられたものになるであろう。この概念を用いることによって従来の世界史では何も変えられない現状に対して少しでも変革に寄与できればと思っている。

(2) 時系列の問題について

時系列こそ帰属意識をもたせる役割を果たすものである。時系列史の難点は、中心的役割を果たす人物のみがクローズアップされ、無名な人々や何の役割も果たしていないと思われる人々が歴史から抹消されてしまうことにある。例えば近代ヨーロッパ史において、スペインからイギリスへと主役が交替した時から前の主役は注目されなくなるということがある。また、時系列史の場合、メインストリートからはずれたアフリカの人々等は記述から洩れてしまったり、北ユーラシアに住む人々も同じ扱い方をされるであろう。西ユーラシアの温帯気候に暮らす人々が考える世界史が現行の世界史である。世界全体をひとつとみなし、すべての時系列史を書くとしたら、それは不可能であろう。過去から現在へと一直線に流れる時間意識を踏まえ、2千年前の見取り図を描くということもある意味においては時系列に沿った見方であるとも言えよう。だからといって、2000年前の歴史を描き、その次に1999年前の歴史を描く必要があるとは思えない。

まず私は「新しい世界史」の研究成果を提示し、それが一般に広く認められるようになった

時点で高等学校世界史に採用されるのが望ましいと考える。国民育成のための教育が高等学校でも大学でも行われていた。優秀な日本国民を育成するのみでは世界に通用しない。グローバル世界においては日本国民という意識のみでは通用しない。地球市民とかグローバル市民という意識が必要である。大学に求められているのはそのような意識をもつ人材の育成である。ここから日本人の世界史ではなく、地球市民、グローバル市民の世界史が必要であることが理解できよう。こうした意味において千田氏が提起したように大学1年に「新しい世界史」を学ばせることには私も賛成である。日本の大学では世界史を教えておらず、東洋史・西洋史を教える。これが問題である。プリンストン大学の歴史教科書には日本の世界史教科書や大学の歴史教科書に比べてはるかに新しい内容が盛り込まれている。そしてその教科書を編集するために様々な専攻の研究者が一同に会して徹底的に議論を重ねるといふ。ところが日本の大学の場合にはこのような議論が為されることは期待できない。学会が東洋史・西洋史に分かれており、共通の議論が為されていないからである。「新しい世界史」を大学の歴史教科書として作成するという案に私は賛成したい。人文・社会科学系の学問が日本国民育成を目的にしていることに対しては根本から方針転換が不可欠であり、学問の枠組みの見直しが必要である。こうしたことが急務の課題であると私は考える。

近現代史が「新しい世界史」に含まれないのは教育上困るという千田氏の指摘に対しては、例えば1890年における世界史の見取り図を描く場合に、そこに国民国家についての説明が含まれていれば十分ではないかと思う。1900年の時点で国民国家がどうなっているかについて説明するならば、当然国民国家の変遷を時系列的に語る歴史が必要になってしまう。あくまでも現在と過去を比較することが目的なので、国別に

国民国家の歴史を説明する必要はない。つまり重要な歴史事項を過去から説明する必要はない。国民国家の歴史はあくまでも過去の説明のひとつのエレメント（要素）として用いるのみである。民主主義が現代世界の特徴的な事象であると認められるとすれば、1000年前の過去の見取り図を作成する場合に、各地域の政治形態はどうであったか、統治者と被治者の関係に着目して見取り図を作成し、それを現代と比較してみればよい。また、戦争について言えば、どういう場合に戦争が起こり、平和が過去の世界においてどれくらい価値をもつものであったのかに着目して過去を見ればよいのではないかと思う。「新しい世界史」の記述の仕方の説明が不十分であったために、批判を受けることになったと思う。

司会 「世界史A」失敗の理由として、何を「世界史A」で教えればよいかということに関するトレーニングを大学で積まないまま現場に突然「世界史A」が導入されてしまったことで、教員が歴史を大づかみに捉える訓練を欠いてしまったことに大きな問題がある。この訓練を大学が怠ると愛知県の事例のように「世界史A」を軽視する教員が増えてしまうのではないかと思うと内心忸怩たるものがある。こうした意味において羽田氏の講演を聞かせてもらい、大いに有益であった。（有朋高校 吉嶺）

質問1 大変スリリングな講演で良かった。私自身が古い歴史教育を受けた人間であり、時系列をはずした歴史に対しては、共感している自分と、本当にできるのかと不安感を抱く自分とがせめぎ合いをしていることに気づく。中心性の排除という主張は魅力的である反面、ウォーラーステインがシステム論で提起した中心と周縁の関係が究明されたことで、この関係を排除する政治的性格が魅力的に見えたのである。中心

一周縁関係を排除する「新しい世界史」はそのような政治的性格を失う結果になるのではないか。それはそれでよいとも思えるがいかがなものか。（札幌大通高校 榊原）

回答1 ウォーラーステインは中心一周縁関係を排除すべきだと主張しているとは思えない。むしろ現状を肯定しているように思われる。現状をうまく説明する議論として中心一周縁関係が利用されているように思われる。経済中心の見方によって富裕層と貧困層の格差を差異として主張し、現状を肯定しているのではないか。過去に中心として存在したスペイン帝国とか、イギリス帝国のあり方を批判するような議論にはなっていないのではないか。

質問1 続き 確かにそのとおりであるが、『歴史的資本主義』においてはそうした批判的意味合いが感じられたように思われる。果たして政治的性格を失ってもよいのであろうか。（札幌大通高校 榊原）

回答1 続き 私が試みる世界史は現在と過去との比較であるので、現在をどう見るかという場合に、それが価値観の違いによって異なることが生じる。例えば、現在の格差社会を批判的に捉える者が現在と過去を比較し、過去の状態を材料にして現在を批判するための政治的道具として用いるということはある得るだろう。

質問2 『新しい世界史へ』では、経済的部分をある程度押さえて新しい視点で見るという記述があったが、ウォーラーステインがインパクトを持ち得たのは、経済的な所から見て語ったからではないか。今話題のマイケル・サンデルもそこをしっかりと説明しているからインパクトがあるのであって、リーマン・ショック以降巨大なマネーが世界を支配しているという意識は

多くの人々に意識づけられているのに、そこをはずして説明してしまうと誰も聞いてくれない空論になってしまうのではないか。(美瑛高校 相馬)

回答2 もっともな意見であるが、私は経済的な価値がすべてを決めるとは考えていない。こうした考え方に対して私は異議申し立てをしているつもりである。経済ですべてが決まる、しかも国別の経済を論じているだけであるような、こうした経済決定論的な世界の見方こそおかしいものではないかと思う。経済以外の価値もまた重要なのではないかと言いたい。例えば、資本主義の行方を案じるだけで済ませるような世界の見方だけでよいのかと言いたいのである。現代世界が経済を重視するのは理解できるが、これこそ近代的な価値観であって、時間の枠組みを超えた見方ではないと私は思っている。

質問3 世界史で何を教えるかということに関して、19世紀以降におけるヨーロッパの国民国家の形成過程において成立した人文・社会科学の枠組みの中で、政治史、経済史、法制史、マルクス主義などの立場で近代歴史学が重要な歴史事象として提起した産業革命、市民革命、世界大戦といった歴史事象を学ぶことなくして果たして世界史を学んだことになるのか、質問したい。(札幌啓成高校 横山)

回答3 輪切りの世界史が重要な歴史事象を省いてしまうことにはならない。例えば1915年における世界史の見取り図を描いてみれば、どこかに必ず世界大戦は入ることになる。第一次世界大戦から第二次世界大戦が起こるまでの経過を説明する時系列史を止めて、輪切りにした世界史をやってみないかと私は提唱している。

1915年で輪切りにして見て、現在の2012年を

比較するという試みがすんなりとうまくいくかどうか、やってみないとわからない。また古い時代と現在との比較も比較の視点を定めるのが難しい。近現代史の輪切りは難しいのは確かであるが、だからといってこの試みから撤退するつもりはないということである。

質問4 世界史を俯瞰し、過去と現代を比較する試みは大変魅力的であるが、その先のビジョン(見通し)もほしいと思う。わたしの世代で言えば、オリンピック、万博、オイルショック、などいろいろな出来事に直面することで自己の世界を拓げ、確立してきたと思う。過去を振り返ることも大切ではあるが、俯瞰する視点は未来に求めるべきではないか。それをどこに置かかということが「新しい世界史」の拓がりにつながると思う。羽田氏自身の視点について質問したい。それがわかれば、生徒に伝えることができるのだが。(静内高校 森)

回答4 未来志向は大切であると思う。「新しい世界史」を構想する契機となったのは私自身の個人的経験である。私は前近代イラン史を専攻していたが、中東、東南アジア、中国などを訪問して気づいたことは、どの地域の人々もわたしたちと変わらないのではないかということである。話は通じるし、価値観もそれほど大きく違っているという印象はなかった。むしろ日本では、九州へ行った時に若い人々と何を話したらよいかとまどうことがあったし、高齢の方とお話をしても話が全然通じないということがあった。イラン人も日本人もたいして違いはないのに、どうしてイラン、日本と区別して語りたがるのか。区別しない方がよいのではないかと思う。現代世界において人間が根本から異なるということはないのではないか。地球上に暮らす人々の考え方や価値観が似通っているのであれば、そのような人々同士が今後どのような政

治形態や社会組織の下で暮らしていけるのかということ、人文・社会科学は追求すべきではないかと思う。国と国の関係をインターナショナルなものとして追求する国際関係論のような時代遅れの学問はもうやめてほしい。合衆国では国家の枠組みを超えたトランスナショナル・スタディーズが盛んになっているくらいである。国際関係論では現在起こっていることを理解できないばかりか、未来志向も生まれない。社会科学系の学問は考え方が硬く、柔軟性が欠けているのでこれを今後は何とか変えていかなければならないと思う。こうした意味で私の研究については従来とは別の試みのひとつとして捉えている。

司会 羽田氏は東京大学の国際本部長を務めておられる。東大を世界にどうやって発信していくかということに尽力されている。そういう立場からの発言ということで大変興味深く話しを聞くことができた。(有朋高校 吉嶺)

質問5 大学の付属校で受験を意識せずやりたいうようにカリキュラムを組み、日本史を教えている。現在、日本史・世界史の枠を取り払った「戦後世界」という単元を作り、2単位で授業展開している。羽田氏のような体験をもたない平均的な日本人の場合、オリンピックでは自国を熱狂的に応援したり、領土問題では自国の国益を主張したりするような状況が見られる。こうした状況において地球市民という考え方にどのようにして置き換えていけるのか、中3の公民の教科書等では巻末の1頁に地球市民的な考え方の必要性が述べられているにとどまる。このままでは現状を越えられないのではないかとの危機感を抱く。新しい世界史をどのようにすれば現実化していけるのか、また「新しい世界史」に適応した「新しい日本史」はどうあるべきかについて質問したい。日本史・世界史の区

分がなくなることはないであろうということ、前提に、そこを出発点として「新しい世界史」がはじまるはずであると思うので。(中大附属杉並高校 大西)

回答5 損保ジャパン財団で「環境の世界史」の可能性について講演した。環境史は私が考える「新しい世界史」に有効ではないかと考える。環境の中の人間という視点で人間を主人公にした歴史を考えているが、そこでは国や地域といった、人工的な概念は問題にならないであろう。環境史を記述する場合、従来とはまったく異なる視点が必要になる。夏の稚内における17℃という気温も、ロンドンの気温と変わらないかもしれない。温度・植生と人間の歴史を構想する場合、従来とはまったく異なる歴史の見方が必要とされるであろう。の点において最近出版された『日本列島の環境史』は注目すべき書物である。ところが従来の環境史も国別に記述されている点が特徴的である。なぜ国別に記述する必要があるのか不思議である。

日本史・世界史の区別はなくなるであろう。この場合の世界史は日本史に対する上位概念となる。私が構想する「新しい世界史」には日本の事柄が多く含まれるであろうし、書物が日本語で書かれる以上、そうなるのが当然である。主語が国になるような「日本は…であった」とか、「フランスは…であった」とかという歴史記述はなくしたいのが私の方針であるが、日本史の場合には主語は何になるのであろうか。例えば「江戸幕府は…であった」というような政治的な主体が主語になるのであろうか。おそらく日本の枠組みだけで記述される日本史は、完成された「新しい世界史」とは適切的な関係にならないであろう。その時にどのような日本史が必要になるかということを考えなければならない。狭いテーマで研究されている日本史学界の現状では難しいとは思いますが、少なくとも日

本という枠組みを超えた日本史の可能性について考えてもらえたらと願う次第である。私たちの共同研究にも日本史プロパーがなかなか参加してくれないし、関心をもってくれない。たまに参加してくれる研究者は日本の対外交渉史の専門家に限られているので、今後は日本史研究者との対話が必要であると思う。

司会 北方ユーラシア史が面白いのは国や地域の枠を越えているからだと思う。次に、5年前に「世界史はいかに語られるべきか」という講演をお願いした東北大学の小田中氏が会場に来ているので、本大会の印象や批評を述べてもらうことにしたい。(有朋高校 吉嶺)

印象・批評：小田中 直樹氏（東北大学教授）

羽田氏の著書に関して現場の高校教員が集まって様々に議論したことに関して私の感想を述べたい。

まず、物の見方や解釈を基準にして「新しい世界史」を考えることはとても重要なことではないかと思う。これは方法論のレベルで歴史の見直しを図ることだと思う。だとすればこの新しい方法論は様々な形で検証される必要がある。本来大学教師こそ自己の方法論の検証をすべき立場にある。羽田氏の「新しい世界史」における歴史を輪切りにしてヨコにつなぐという方法は、従来の高校世界史Aの前近代の記述で採られている輪切りの方法と同じである。世界史Aの輪切りの方法がなぜうまくいかなかったのかについて検証される必要がある。検証の主体として最も適しているのは高校教員である。また、時系列史とヨコに並べる歴史とどちらが面白いのかということも検証可能である。生徒の反応を見れば一目瞭然である。従来は研究者（大学教員）と教育者（中学・高校教員）の分業体制が一般的とみなされていたが、方法の実践が教育による検証であるなら、教育は研究の

重要なアクター（担い手）であると考えられる。大学入試を巡る高校側と大学側の不毛な相互批判を打破するために、本日の発表は大変有益であると思う。羽田氏の方法を巡るフォーカスは中・高・大学の連携を強化し、教育者もまた研究の重要なアクターになりうる。そして生徒も研究の基本的なプロセスを追体験することによって研究のアクターになりうる。こうしたことを加藤公明氏が『新しい歴史教育のパラダイムを拓く』（地歴社）で述べている。こうなると今まで以上に高校教員も研究に従事する必要が生じる。教育とは研究成果をパッシブ（受動的）に学ぶだけでなく、その転換をもたらすアクティブ（積極的）な意義をもつことを、大学と中・高の対話を通して実現することができるのではないかというのが私の意見である。



<発表者3名のコメント>

◇ 後藤

日本国家における日本固有の問題もあるが、世界史と日本史は別なものだという態度を取るのはいかがなものか。世界史の議論に朝鮮半島研究者や北ユーラシア研究者が参戦すればよいのであって、こうした世界史の議論に積極的に参加する日本史プロパーが増えればよいと期待している。

◇ 中村

イギリスと世界史の関係と日本史と世界史の

関係を見ると一目瞭然のように、日本史研究者は頑固すぎるのではないか。元々イギリス史のようなナショナル・ヒストリーと世界史の明確な区別があるわけではない。イギリス帝国史や大西洋史の研究生活で終わってしまうのがほとんどなので、世界史にまで口を挟む必要はないと言われればそれまでだが、だからこそ歴史を広い視野で研究する必要があるのだが、日本史研究者が世界史研究に参加するのは現状では難しいのではないか。後藤氏のような世界史にも発言できる日本史研究者が出てきているので、いずれは何とかなると期待したい。

司会 羽田氏のような「新しい世界史」の試みがオーソドックスな中国史から出てこないのはなぜかと千田氏に質問したい。(有朋高校 吉嶺)

◇ 千田

中国史研究者は現状に安住していて、新しい歴史が出たら「夷狄の歴史」として排除してしまうのではないかと(笑い)。私は現在公民科倫理を主に教えているが、イスラーム思想が2頁しかないなど、倫理は世界史よりひどい状況にある。今や、地歴と公民といった科目の分類自体が限界にきているのではないかと。羽田氏の「新しい世界史」の方法を倫理や政経で使ってみようかと思ってみたりもする。こんなことを現場で試みるのも面白いのではないかと感じた次第である。書物だけでなく、ネット上で発表された新しい研究成果を次々と現場で使用し、検証してみればよいと思う。

◇最後に：本研究会会長より
橋本(室蘭東翔高校校長)

まずは発表者の方々に感謝したい。いかに教えるかということは、何を何のために教えるのかということを根本まで考えて実践することは

なかなか現実にはないと思う。本日の羽田氏の発表から根本から考えて実践することの必要性を教えてもらった。話を聞いてこれから日本や世界を支える人材を育てることを意図したものかと思ったが、わたしたちの世界史の授業において途中で脱落してしまう生徒、例えば神聖ローマ帝国で躓くと、以後400年のヨーロッパ史がわからなくなってしまう生徒がいるが、だからといってその生徒が世界に対する興味を失ったわけではないのに何かに躓くとついていくことができなくなるという実態が生まれるのは世界史という科目の構造によるものではないか。羽田氏の「新しい世界史」は、こうしたジレンマから脱却する可能性をあたえるものではないか。「新しい世界史」は、エリートのための世界史で終わらないような新たな可能性をもつものではないかと感じた次第である。

また、後藤氏の「癒しを求めるナショナリズム」と「辺境のナショナリズム」を克服するという主張に関し、「癒しを求めるナショナリズム」自体は、かなりやっかいなものではないかと思う。その危うさを世界史の授業で触れることができればよいと思う。昨年まで大阪大学歴史教育研究会の方々から聞かせていただいた世界史から出来る限り固有名詞を排除するという試みも羽田氏の「新しい世界史」と結びつく側面があると思う。しかし、授業では「新しい世界史」を試みたが、考査は相変わらず固有名詞ばかりを問う出題となっては元の木阿弥である。今回の発表を無駄にしないよう、努力を継続し、一年後に再会でできればと願う。(了)



第44回研究大会のご案内

日 時 平成25年8月9日（金）9：00～〔予定〕

会 場 札幌市教育文化会館 研修室403〔予定〕

（札幌市中央区北1条西13丁目）

講 師 未定（調整中）

研究発表 未定（募集中）

※前日に日本史研究会大会が行われます。

◆編集後記◆

会報第19号を発行致します。日頃からの会員の皆様のご協力・ご支援に、改めて御礼を申し上げます。また、記録をご担当頂きました先生方には、お忙しい中にも関わらず、原稿を作成して頂き、誠にありがとうございました。

今後とも紙面の充実に力を入れて参りますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。また、編集作業の遅れや不備な点など、関係の先生方にご迷惑をおかけしましたことをお詫び致します。なお、大会記録につきましては、基本的に敬称を省略させて頂いております。ご理解を頂ければ幸いです。（札幌南・藤井秀樹）